

■ 活動記録 ■

◆ 教育事業 ◆

2014 年度先端社会研究所リサーチコンペ

【募集期間】：2014 年 4 月 25 日（金）～5 月 30 日（金）

【リサーチコンペウィーク】：2014 年 6 月 9 日（月）～14 日（土）

【公開プレゼンテーション】：2014 年 6 月 14 日（土）

関西学院大学上ヶ原キャンパス先端社会研究所セミナールーム

◆開催の趣旨／リサーチコンペを振り返って

佐藤 哲彦（先端社会研究所副所長）

リサーチコンペとは複数の申請課題の間で研究助成獲得を競う事業であり、本研究所では 2010 年度から始めて今年度で 5 回目となる。申請資格は学内各研究科の大学院生もしくは研究員であり、コンペではまず申請者が提出した研究計画書を審査員が審査し、次に公開プレゼンテーションの場で申請者自身が、当該研究課題がいかに魅力的で実現可能性が高く、さらには先端社会研究所の研究プログラムに合致したものであるのかについて発表を行うという手順で審査される。そして書類審査とプレゼンテーション審査の合計により採択者が決定する。本年度のリサーチコンペ事業費は 80 万円となっており、個人申請による最高助成額が 20 万円であることから、最大で 4 名の採択者が見込まれていた。

本年度の申請者は 8 名であり、いずれも興味深い研究課題であった。その中で採択不採択を分けたのは、例年同様、主として先端社会研究所の研究プログラムである「他者問題」との親和性であったといえる。ただしそれだけでなく、とくに若い大学院生の申請課題では、その実現可能性が疑問視されるなどもあった。研究課題の新鮮さや斬新さはともすれば実現可能性とトレードオフの関係になる。そのような状況の中では、一足飛びに発想するのではなく、地道に積み上げていくような姿勢で研究を計画し、またそれに取り組むことが必要とされる。実際の審査過程でも、これらの側面を考慮した審査がなされた。結果的に採択されたのは 4 件である。以下に、その申請時の概要とそれに対して審査員から出た意見や講評について記しておく。

社会学研究科博士後期課程 3 年の藤井和子による申請課題「戦後開拓を生きる——石垣島「自由移民」の生」は、沖縄県石垣島をフィールドに、第二次大戦後の「自由移民」と呼ばれる、「計画移民」とは別に自分の意思で沖縄本島や宮古島などから入植した人びとが、どのような独自の生のあり方や世界観を生み出してきたのかを明らかにしようとする研究である。この研究はこれまで研究が乏しかった「自由移民」について研究するという意図や方向性、さらには予備調査などを踏まえた計画性などが評価された。ただしその一方で、生活者というのはどの場所であれ誰であれ、自ら工夫して生き抜いていくものであるのだから、「自由移民」の独自性を安易に仮定することはできないこと、また研究の一般性を考えた場合に、「自由移民」という呼称はどのような分析用語に

変換可能なのか、などについて意見が出された。これまでの移民研究やその理論的枠組みの中での位置づけを探ることで、これらの疑問に答えていく必要があるとされた。

社会学研究科博士後期課程2年の谷岡優子による申請課題「地方花柳界の文化資源化——模索と葛藤をめぐって」は、現在衰退状態にある地方花柳界の研究である。地方花柳界では衰退に対処するために「文化資源化」「観光化」「芸妓会社化」「NPO法人化」などの模索が続いているが、それがかえって当該地域の社会的・文化的コンテクストとの関係で葛藤を生み出すなどしている。そこでそのような葛藤に対して人びとがどのように対応しているのかを明らかにしようという研究である。この研究もまた、これまで十分には行われてこなかった地方花柳界の研究であること、また申請者はすでに今回の調査対象地とは別の地方花柳界の状況について調査を行ってきたことなどが評価された。ただしその一方で、そのような模索が行われる時点で、すでにかつての花柳界とは別の花柳界となっているのであるから、現代日本における伝統文化の変容といった観点などが必要ではないかということ、またこの研究が前提としている「文化」とは何かということなどについて質問や意見が出された。ここでも上記課題と同様に、前提として想定している「文化」を明確化し、それをより広い文脈との関係において位置づける必要があるとされた。

社会学研究科博士後期課程3年の矢崎千華による申請課題「ナラティブとナラティブの接続に関する社会学的研究——明治時代の投書を事例として」は、明治期の雑誌の投書欄を対象として、身の「不幸」を訴える投書が別の「不幸」に関する投書を誘発して、次々に「不幸」な身の上の比べ合いが始まる事態を観察しながら、本来比較不可能なはずの個人の「不幸」の比較とその接続がどのようにして可能なのか、またそれが何を含意しているのかを、とくに共同体の形成という面から明らかにしようという研究である。この研究は、本来は比較不可能な「不幸」がそれを比較可能にするナラティブによって相互に接続され、その連鎖が近代化過程における共同体の成立や連帯を可能にしているというユニークな発想が評価された。ただしその一方で、この研究自体を可能にしている方法論や、言説同士の接続や言説と社会の関係を明確化する議論が必要であるなどの意見が出された。また、分析結果の妥当性を示すために分析対象である資料の特性や意味をより広い文脈の中で位置づける必要があるとされた。

社会学研究科博士前期課程1年の加藤晴美による申請課題「戦後・名古屋の都市イメージ作りと名古屋駅における排除——1964年東京オリンピックの際のクリアランスを事例に」は、戦後復興期から高度経済成長期の名古屋において、「産業の中心地名古屋」「東京大阪と並ぶ三大都市」といった都市のイメージの下で、都市の周縁部がどのように問題化されてきたかを、とくに1964年東京オリンピックに伴う名古屋駅周辺のクリアランス——名古屋駅周辺にたむろしていた日雇い労働者やセックスワーカーの女性たちの排除——が行われる過程で彼らがいかに他者化されたかということを通して、明らかにしようという研究である。この研究は一見、クリアランスで排除された場所が新たな姿で新たな時代に再構築されるというよくある事例について研究にも見えるが、対象を名古屋にした点で、東京や大阪との比較で微妙な立ち位置をとることや都市アイデンティティ構築の難しさが、かえって他者化を新しい角度で論じることを可能にするのではないかと評された。ただし申請時の研究計画ではいまだ名古屋の都市イメージとクリアランスとを有機的に結びつける枠組みが不十分であったため、それを研究過程における聞き取り調査などによって補完する必要がある

るとされた。

以上が本年度のリサーチコンペで採択された申請課題の概要とそれに対する意見・講評である。今回採択されたのは申請の半数ではあったが、残りの申請課題がどれも研究として不適當であったというわけではない。すでに述べたように、「他者問題」という研究プログラムとの親和性が問われたことが大きいからである。再度申請しようという方々には、その点を再考してチャレンジしていただきたい。

以下は、採択課題の研究計画要旨、および中間報告である。

◆採択された研究計画要旨／および中間報告

◎戦後開拓を生きる

－石垣島「自由移民」の生－

藤井 和子（社会学研究科博士課程後期課程3年）

・研究計画要旨

沖縄県石垣島の歴史は、琉球王朝時代から第二次大戦後まで、「開拓」（山林・原野に入植し新たに耕地や集落などを形成すること）の連続であったといっても過言ではない。本研究は、同島をフィールドに、開拓者、とりわけ第二次大戦後の「自由移民」と呼ばれる開拓者たちの生のあり方を、「他者」問題と関わらせて検討することを目的とする。

戦後の石垣島開拓の担い手として一般に知られているのは、琉球政府がさまざまな条件を整えた上で希望者を募集して入植させた「計画移民」である。しかし、それとは別に、「計画移民」以前に、自らの意思で沖縄本島や宮古島などから入植した人々があり、この人々は行政側からは「自由移民」と称されている。「自由移民」は、先住者や「計画移民」からは、ある種の「流れ者」的な存在として、「他者」化された存在であり、また学術研究の面でも、「計画移民」についての調査研究は一定の蓄積が見られるものの、「自由移民」については研究が存在していない。

「自由移民」は、行政の支援のもとに開拓団を組織して入植した「計画移民」とは異なり、個人入植者である各自が自らの才覚で開拓を生き抜く必要があったため、独自の生のあり方や世界観を生み出している可能性が高い。現地で「他者」化され、学術研究でも光の当てられてこなかった「自由移民」の生について内在的理解を進めることが本研究の目的である。

・中間報告

11月に2週間、八重山の石垣島、西表島、竹富島、鳩間島において「自由移民」を中心に開拓に関する調査研究を行った。「自由移民」という呼称は現地で定着しており、開拓村に行っただけでないと明確に自分たちは「計画移民」だと自ら最初に名乗ることが多かった。このことから、地域住民の間で「計画移民」と「自由移民」とは区別して認識されていることがわかる。

「計画移民」については、石垣市立図書館で各村が発行した記念誌を調べ、開拓村の学校を実際に訪ねた。開拓村ではほとんどが小学校、中学校は同じ敷地にある。教員には児童、生徒数の極端

に少ない僻地校と捉えられていた。教員は2年か3年で移動になるうえ、校長は沖縄本島など別の地域から単身赴任等の転勤で着任したばかりだから地域のことはわからないという答えがほとんどだった。現在は、その地を切り拓いた移民の4世が学校に通っていることになるため、学校で移民による開拓を学ぶことは極端に減っている。

学校に隣接した給食センターで、「自由移民」を実際に知っているという人がいて自由移民の方の名前とその村を突きとめた。このように自由移民を石垣島でも探しだすことは難航したのだが、「自由移民」一世の3名の聞き取り調査を行うことができた。「自由移民」の実態と行政とのかかわりやどのように生きて今どう思っているかということ、今まで誰にも語らなかったのを、研究してくれるならありがたいという人ばかりであった。

彼らの生活は「計画移民」のように集団ではなく個人単位である。「計画移民」のようにひとつの村になっているわけではなく、出身も入植時期も異なる「寄せ集め」の村である。しかし「ゆいまーる」とよばれる平等な協働作業で耕地を増やしていったのである。村人の結束は家族のように強くなっていき、収穫が終わると、農耕馬を浜で競走させたり、ハーリーも行われたことがあったという。しかしながら今、これらの記録はまったくない。なぜなら、カメラを持てるような人は当時、村には一人もいなかったので写真の一枚もないからである。しかし「目に焼きついている大切な思い出だ」というので、絵に描くようにすすめたが、「学校に通えず絵を習うこともなかった人生なので、どうやって描けばいいかわからない」といわれた。「計画移民」の村のように立派な記念碑も記念誌も何も残せなかった悔しさや虚しさがある。しかし学校の落成式の時には芝居を村人で演じたそうで、そのときに覚えた踊りを現在、島の青年団に教えて自分なりに伝承しているということである。

今後、1月に石垣島、2月に沖縄本島で現地調査を行う予定であり、3月以後論文を執筆する。

◎地方花柳界の文化資源化

—模索と葛藤をめぐって—

谷岡 優子（社会学研究科博士課程前期課程2年）

・研究計画要旨

日本各地には、前近代、もしくは近代以降に形成・展開されてきた花柳界（芸妓、料亭、待合茶屋、検番、置屋、芸事の師匠からなる社会）が存在し、各地の花柳界はそれぞれが現地の社会・文化的コンテクスト（文脈）と密接な関わりがある。申請者は、2013年度関西学院大学先端社会研究所リサーチコンペ採択課題において、長野県諏訪湖沿岸部の花柳界をフィールドに、花柳界内部での〈芸〉と〈色〉の実態と再編について焦点をあて、調査と分析を行ってきた。

この調査のなかで、上記の点以外にも、1990年代から日本各地の地方花柳界が衰退状況にあること、この状況を打破すべく、各地の地方花柳界では「文化資源化」「観光化」「芸妓会社化・NPO法人化」など多様な「模索」が展開されていることが明らかとなった。しかし、これらの「模索」の全てが成功しているわけではない。諏訪湖沿岸部の花柳界では、模索による再編が当該地域の社会・文化的コンテクストと適合しなかったため、花柳界内部で葛藤が生じている。

これらのことを踏まえ、本研究では、花柳界再生への模索と、模索により発生する葛藤とそれへ

の人びとの対応のあり方について、秋田市川反での現地調査をもとに解明する。

・中間報告

日本各地には、前近代、もしくは近代以降に形成・展開されてきた花柳界、つまり、「芸妓（歌舞・音曲によって酒宴に興を添える女性。芸者ともいう）、料亭・料理屋（高級日本料理店）、検番（芸妓の派遣等を仲介する事務所）、置屋（芸妓を派遣する業者）、芸事（三味線、踊り等）の師匠などからなる社会」（島村 2013:92）が存在してきた。

1990年代以降、花柳界は、客離れや次代の芸の担い手不足から全国的に衰退しつつある。そして、こうした状況を克服するべく、花柳界関係者は、花柳界の「文化資源化」や「観光化」という新たな戦略を立て、花柳界の再編、再活性化を模索しようとしていることが、2013年度のリサーチコンペ採択課題による調査で明らかになった。

しかしながら、こうした再編は必ずしも成功しておらず、そこには関係者間での衝突、葛藤状態が発生している。

本課題は、地方花柳界をめぐる模索と葛藤を、花柳界を探るうえでの重要な論点と考え、秋田市川反の花柳界をフィールドに、花柳界再生の模索と葛藤に直面する人びとの対応のあり方について検討する。

2014年4月、秋田市で川反芸者を「秋田舞妓」の名称で復活させようと運営会社「せん」が発足した。発起人は秋田市在住の成田千夏氏で、「地元秋田の地域資源を活かした事業を起こしたい」という思いから、川反芸者に着目し、事業化に至った。

成田氏は起業するにあたり、川反の花柳界のほか、県外の花柳界についても調査し、そこで1986年に新潟市で発足した株式会社「柳都振興」を皮切りに、1990年酒田市の「港都振興」、1996年山形市の「山形伝統芸能振興」など、各地で芸妓養成および派遣会社が設立され、「芸妓の社員化」というモデルが展開していることを知る。

これらの地域では、事業化にあたり、これまで当該地域の花柳界で用いられてきた半人前の芸妓を意味する「半玉」に代わり、「振袖さん」、「酒田舞娘」、「山形舞子」などの新たな名称を創設している。このような背景から、川反の花柳界においても、「秋田舞妓」という名称を新たに創設したのではないだろうかと推測される。

今後の調査では、運営会社設立の経緯と「秋田舞妓」に関する模索のほか、県外の花柳界との関わりについても分析をすすめたい。

参考文献

島村恭則（2014）「高知の花柳界」『地方都市の暮らしとあわせ 高知市史 民俗編』高知市史編さん委員会編、高知市。

◎ナラティブとナラティブの接続に関する社会学的研究

—明治時代の投書を事例として—

矢崎 千華（社会学研究科博士課程後期課程3年）

・研究計画要旨

ナラティブとは、複数の出来事を時間軸上に配列することで成り立つひとつの言語形式である。本研究は、そのように特徴的な言語形式が社会変動期において人びとによって実際にどのように使用されながら、社会的な機能を果たしてきたのかを研究するものである。その際、本研究では、日本における社会変動期として位置づけられる明治時代を対象としながら、ナラティブにより近代社会が形成される過程を記述することを試みる。

分析の対象は明治期の雑誌上の投書欄であるが、その特徴として一つの投書が他の投書を誘発し投書者内で「不幸」な身の上の比べ合いが始まることをあげることができる。人びとはどのようにして自身の「不幸」を訴えるのか、また、どのようにして先行するナラティブよりも「より不幸」であることを訴えるのか。本来、比較不可能であるはずの個人的な物語としての「不幸」が比較という行為を通じて接続され連鎖していく。本研究の論点は、その奇妙な接続と連鎖の社会学的含意は如何なるものなのかということである。「不幸」という表象を通じて個人的なものが連鎖し、近代社会というある種の連帯性が可能になっているということを分析的に明らかにしていく。

・中間報告

明治時代の投書の分析を通して見えてきたことのひとつは、当時の人びとがどのようにして「不幸」を受け入れていたのかということである。とくに、大半の「不幸」な境遇にある女性たちにとって、モデルストーリーに自己を投影させることが困難であった状況が見えてきた。

当時の男性たちには、立身出世に代表されるようにわかりやすく、コミットしやすいモデルストーリーが存在した。それに対して、女性たちには自身を個人としてアイデンティティできるモデルストーリーも少なく、また、実際にそのようなモデルストーリーにコミットすることも困難であったと考えられる。

本研究に取り掛かった当初は、投書と投書のつながりを単なる「不幸」自慢のように捉えていた。しかしながら、資料の分析を通して本研究の意味合いは大きく変化してきた。投書と投書のつながり——ナラティブとナラティブの接続——は、単に「不幸」の比較を行っているのではなく、比較という行為を通して人びとの間に「不幸の共同体」が形成されているのではないかとということが明らかになってきたのである。

「不幸の共同体」は、何かに連帯を求めているがそれが実現できなかった人びとにとっての「セーフティーネット」のような役割を担っていたと考えることができる。大きな戦争へと傾いていく中で、「国家」あるいは「近代的国家」というような血気盛んで積極的な連帯にコミットできなかった人もいたはずである。というより、むしろそのような人の方が多数だったのではないかと。「不幸」の共同体は、そのような積極的な連帯にコミットしにくい人びとによる消極的な連帯であったのだろう。ナラティブとナラティブの接続は、ばらばらの個人をひとつの「想像のつながり」(Ander-

son 1983=1997) として観念させる統合的機能を果たしていたと考えられる。

急速に発展していくメディアを使用し、遠く離れた知らない誰かと「不幸」によってつながる。人びとは、そのようにしてつながることを通じてさまざまな「不幸」の存在を知り共有していた。他者の「不幸」を知り共有することで、自身の「不幸」を受け入れることが可能になっていたと考えられる。

日清・日露戦争を経たとはいえ、社会変動期において、多くの人びとは貧しさと困難の中であった。そのような中で、お互いの「不幸」を語り合うことが重要な機能を果たしていたということが指摘できる。比較というようなかたちで「不幸」を接続させながら語ることを通じて、人びとは「自分だけが『不幸』なのではない」ことを実感し、その「不幸」を受け入れていくすべを考えることができたのではないだろうか。今後は、ナラティヴとナラティヴの接続を「不幸の共同体」の形成という観点からさらに研究を深めていく予定である。

以下に、これまで調査を行った雑誌を挙げる。『婦人世界』、『家庭之友』、『以良都女』、『婦女雑誌』、『女鑑』、『女子之友』、『をんな』（途中、『なでしこ』へ改題）、『婦人界』、『婦人画報』、『ムラサキ』、『明治の婦人』、『婦人之友』、『家庭雑誌』、以上 13 雑誌を調査した。『婦人世界』以外の雑誌は、発刊から終刊まで全期間の調査が完了している。今後は、『婦人世界』の継続調査を行いつつ、他の雑誌の調査を行うことを予定している。

参考文献

Anderson, B. 1983, 1991 *Imagined Communities : Reflection on the Origin and Spread of Nationalism* (=1997、白石さや・白石隆訳『増補 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』NTT 出版)。

◎戦後・名古屋の都市イメージ作りと名古屋駅における排除

—1964 年東京オリンピックの際のクリアランスを事例に

加藤 晴美（社会学研究科博士課程前期課程 1 年）

・研究計画要旨

現在の名古屋駅周辺は、都市社会学の「他者」問題で扱われてきたマイノリティが集まる場である。歴史を紐解いてみると、戦後の駅周辺は「他者」が集まり、また、排除される場であった。1964 年の東京オリンピックの際、名古屋駅ではクリアランスが行われた。「名古屋の顔」である名古屋駅周辺にたむろしていた日雇い労働者やセックスワーカーの女性を他者化=排除しようとした。

本研究では、戦後期の名古屋の都市イメージ作りの中でどのように他者化が行われたのかを 1964 年の東京オリンピックに伴うクリアランスから明らかにしていく。その際、分析のポイントとして、高度成長期中で周辺都市・名古屋からみた中心都市・東京の意味付け・東京との関係性の中にどう名古屋を位置づけたかったのか、という点を補助線とする。さらに、冒頭で述べた現在の名古屋駅における新たな「他者」がどのように現れ、まなざされてきたかについても追っていく。

・中間報告

本研究は、戦後復興期の名古屋において、「産業の中心地名古屋」・「東京大阪と並ぶ三大都市」といった都市のイメージのもと、「産業都市・名古屋」を作り上げる中で都市の周縁部はどのように問題化されてきたかを明らかにする。

これまで、さまざまな都市研究の領野の中で都市のアイデンティティ・都市のイメージづくりについて議論されてきた。とりわけ、「都市論」と呼ばれる領野での都市のイメージ分析の蓄積は多く、たとえば、近代期から現代に至る東京の盛り場イメージ形成を都市において生成する文化との関連で分析した吉見（2008）のものが代表として挙げられるだろう。

一方で、名古屋における都市イメージを主軸にした研究はなく、また名古屋を事例とした都市研究は少ない。たとえば、名古屋については産業の変化と都市編成の間連を生態学的に分析した松本（1995）が挙げられるが、マクロな視点に立つもので都市空間の構造とミクロな都市の動態分析との関連については十分には検討されていない。

本研究では、「産業都市・名古屋」にふさわしい都市空間作りが行われる中で都市の周縁部においてどのような政治過程が起こったか、またその背景について考察することを目的とする。具体的には、名古屋駅の西側で起こった土地の区画整理ならびにクリアランスに着目する。

戦後間もなくの、駅の西側（駅裏）はバラックが立ち並んでいた。ここは当時問屋街で、闇市から始まって一時期は名古屋の商店主がここに買い付けにやってくる場所だった。その後も市場から商店群が発達していった。ところが、'64年東京オリンピックに際して新幹線用地確保のためにクリアランスが始まる。その際、駅の東側がビルが立ち並び整理された空間を為していたのに対して、西側は未整備で「戦後の雰囲気が残った」空間として対比され、駅西は「名古屋の顔」である駅にふさわしくないものという言い方が為されるようになり、東側＝表、西側＝裏として認識された。

クリアランスは突貫工事的に行われ、とりわけ駅のすぐ裏手（新幹線用地にされた場所）に形成されていた韓国・朝鮮系の人が集まる国際マーケットは跡形もなく取り払われた。西側の整備はオリンピック閉幕後も行われ、道路拡張によって土地が大きく動いて行った。

現在の駅西地区の人々に聴き取りを行ったところ、「痛みの伴う歴史」としてクリアランスや区画整理が語られ、記述されていた。それは、語り継がれる大事な歴史であると主張するものの、「歴史化」されたものとして受け止められていた。現在のきれいに整備された駅西地区になるために、ひいては名古屋の発展のためには、「痛みの伴う歴史」もまた必要な歴史であったと認識されていた。産業都市・名古屋の発展史のなかに、排除の歴史が美談の一部として解釈されているように考えられる。

このような歴史化は現在の文脈に照合して選びとられたものとも考えられる。つまり、リニア新幹線駅開設によってさらに大きく飛躍する名古屋市、名古屋駅と駅西地区という文脈が現在の駅西地区に共有されていることもあるだろう。リニアの駅開設による集客効果や土地売買に伴う利益などに対する期待と共に、開発の歴史も美談に回収されているようだ。

参考文献

- 松本康, 1995, 「現代都市の変容とコミュニティ、ネットワーク」松本康編『増殖するネットワーク』勁草書房, 1-90
- 吉見俊哉, 2008, 『都市のドラマツルギー』, 河出書房新社